

## シリア国の自然と農業 (3)

## 第3回：地中海沿い山脈地域

地中海沿いの南北に走る山脈地域は、死海地溝帯の地質活動にもなって形成された。ダマスカスの南西には標高 2,814m のジャバル・シェイクで知られるハラムン山地が急峻な地形を刻んでいる。ダマスカスから北の部分はカラムン山地と呼ばれており、標高 2,500m 台の山々が連なる。レバノン北部の国境でいったん山容が途切れるが、アラウイン山地とザーウィエ山地がガープの低地を挟むように北に伸びてトルコの山岳地帯に連続している。降水は冬期に集中し、高所では大量の降雪となり、水資源の供給源となっている。

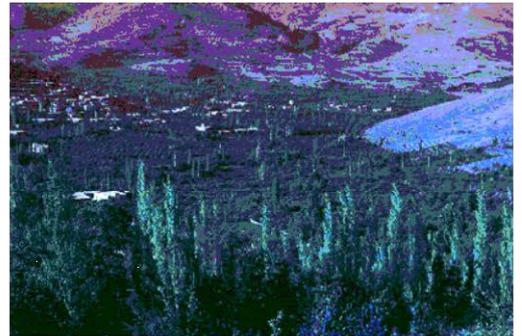
ダマスカスからベイルートに向かう途中の山間部はダマスカスを潤すバラダ川の水源地になっており、チェリー、アンズ、リンゴを中心とした果樹の重要な産地ともなっている。また、ジャバル・シェイクの山麓には風光明媚なリンゴ村が点在する。北部山間地でも土地利用が進んでおり、場所によっては山頂付近まで段々畑が続き、見事な景観を呈している。一部地域では古くから養蚕業が盛んであったが、近年衰退の一途を辿っており、桑の木が他の果樹に植え換えられつつある。また、この地域には自然植生であるシンディアン森も広く分布しており、一部ではレバノン杉の保護区も設定されている。

リンゴの生産地に共通の問題として、早春期の低温による花芽の凍結害がある。地元では古くから古タイヤや軽油を利用した燻蒸、スプリンクラーによる水の散布等の対策が取られている。最近では普及局が中心となって防霜ファンの導入に力を注いでいる。また、リンゴの栽培地域はいずれも標高の高い地域に分布しており、各河川の最上流部に位置している場合が多い。このため、栽培に使用する肥料や農薬が河川の水質を汚染する危険性が高くなっている。林業に関しては、FAO による社会造林プロジェクトが進行中である。植林活動の短期的な目的は、飼料木、燃料木、木の実等の生産であるが、長期的には防風効果や土壌保全効果さらには野生生物の保全効果につながる。本活動の問題点は、その土地を昔から様々な形で利用してきた地域住民との衝突である。今後は、持続的な農業あるいは畜産を推進するための総合的な森林管理を、地域住民の理解を得ながら発展させて行くことが重要な課題となっている。最後に WID に関連する話題であるが、山間部の農村女性は小麦や綿花といった畑作物を栽培する農村女性に比較して、農作業に従事する時間が短い。そのため、生産物である果樹や木の実の食品加工、あるいは絹織物といった農家の副収入増大に結びつく活動のポテンシャルが極めて高いと考えられる。今後、この辺りの活性化も極めて重要な課題になろう。



段々畑

リンゴ村



桑畑

社会造林



## シリア国の自然と農業（４）

## 第４回：内陸平原地域

沿岸山脈の内陸側や北部丘陵地帯の南麓には、扇状地性や盆地性の平坦地が連なって分布している。冬期には比較的降水に恵まれ、山岳地帯からは河川や湧水が流出し、さらに夏期には高温乾燥条件に恵まれるため、本地域は古くから重要な穀倉地帯として発展してきた。実際、冬期に本地域を訪れると、見渡す限りの麦の海原といった景観が広がり、肥沃な三日月地帯と呼ぶにふさわしい地域である。

本地域における主な栽培作物は大麦、小麦、綿花、甜菜等であるが、ひよこ豆、レンズ豆等のマメ科作物やトウモロコシ等も広く栽培されている。大麦は天水で栽培可能であるが、綿花、トウモロコシ等の夏作物は灌漑無しには栽培できない。本地域における農業の大きな特徴は、耕地で栽培された作物の収穫残渣が家畜に対する重要な飼料資源となっていることである。春先から初夏にかけて牧野における自然植生を飼料として利用していた家畜達は、小麦の収穫とともに耕地に移動してくる。小麦の収穫残渣を利用した後、各種夏作物の収穫跡地を移動し続ける。綿花の収穫残渣を利用し終わると、冬の間は給餌が一般的となり、牧野における春先の自然植生の生育を待つことになる。



肥沃な三ヶ月地帯



家畜による収穫残渣の利用



塩類集積地



排水路



養魚

土地利用に関連して、今後の持続的農業開発の推進には、これまでのような小麦・綿花の連作による収奪農業からの方向転換が重要な鍵を握っている。基本的には輪作体系の見直しが必要と思われるが、小麦、綿花といった主要作物については、政府により生産計画が立てられている。この生産計画が、時として適正な輪作体系の実施に影響を与えている。今後、効率的且つ持続的土地利用を目指した関連各局による調整が必要となろう。土にやさしい農業を展開するために、輪作体系の中にマメ科作物を積極的に導入したいところであるが、収穫の機械化等に問題があり、これまでのところ思うようには進んでいない。今後、作物栽培と家畜生産を合理的に組み合わせた有機農法の展開が特に重要となろう。そのためには、堆厩肥や緑肥あるいはリサイクル堆肥の利用に関する研究も、さらに促進されるべきである。次に、水利利用に関連して、灌漑農地における塩害が極めて大きな問題となっている。塩類集積を引き起こす主な要因は水管理の不適正にあり、特に給水中の漏水や排水不良が至る所で問題となっている。一度塩類が土壌表面に集積してしまうと、その改良には莫大な投資が必要となる。従って、当面重要なことは塩類集積を引き起こさないような水管理システムの確立にあると思われる。そのためには、作付体系に応じた給水システムの策定及び運用、農民グループによる用排水路の維持管理等圃場レベルでの水管理の徹底が必要になってくる。また、塩類土壌の有効利用に関しては耐塩性作物の導入や養魚といった新しい試みも興味深い。